

私の物語

をたどって

2

tadotte@sahi.com

分子生物学者で精神科医の糸川昌成(57)は、母が統合失調症だったことを隠してきた。何が彼を変えたのか。

2010年秋、糸川は偶然入った書店で漫画家中村ユキの本に吸い寄せられた。『わが家の母はビョーキです』。「これだっ」とひらめく。

4歳のとき母親が統合失調症になったユキの過酷な日々が、漫画で描かれている。そのユーモア！ 糸川は一気に読み、笑ってしまう。親の病を公にする勇氣と、どここい生き抜く迫力に感動した。

11年秋、糸川は、精神科医の夏刈郁子(64)が統合失調症の母との壮絶な人生からの回復を書いた論文を専門誌で読む。医師が自分を症例報告するなんて。驚き感動した。

「生きている間に母に会わなかった後悔」を手紙で伝えようと、夏刈に「会っても後悔することがある」と言われ、胸にしこっていた罪の意識がほどけ始めた。

12年5月、雑誌の座談会で3人が会う。中村、夏刈、糸川。母が同じ病だった「子ども」同士。初対面なのに涙と

症状には意味がある



糸川昌成が最も好きな、母みゆき20代の笑顔の写真＝糸川さん提供

笑いで7時間話し続ける。初めて母が「語ってよい存在」になった。こんな安心と解放感は人生で初めてだった。

13年、夏刈がさらにカルテを取り寄せて「母調べ」をしたと知り、糸川も思い立つ。カルテで母の症状を知る。

「異常所見」に、父の背広とカバンをハサミで切る／父の大きな傘の代わりに母の赤い傘をもたせる、とある。

これは異常なことか？
時代は戦後の高度成長期。母は北海道からたった1人で東京の大家族に嫁ぎ、頼りの夫は銀行員で夜中まで帰らない。背広とカバンがなければ会社に行けないだろう。どうしても行くのなら私の傘を連れていって。そんな切なさが

あったのではないか……。糸川は医師として、母の行動の意味を理解できた。

「症状には意味が、文脈がある」。夫や医師にそう理解されていたら、母は救われて、快方に向かったのではないか。少量の抗精神病薬で育児ができたのではないか。

カルテにあった電話番号をたどって14年正月、母のいとこと姉に初めて会えた。2人は写真を手し、母を「みゆきちゃん」と呼んで、その人生を語ってくれた。

母は実母を生後すぐ病気で亡くし、継母とは心底うちとけぬまま、思春期をすくすく明らから子どもが大好き。保母にあこがれ、探しあてた実母の親戚を頼って上京。愛情

を求めて見合い結婚をして待望のわが子を産んで……。

こんな母の物語と写真を手にし、糸川は自宅で妻や子どもと母の人生の話をした。こたつに広げたたくさんの写真から1枚、糸川の膝に落ちた。20代の母の伸びやかな笑み。母は薬で症状は落ち着いていたのに、退院できないまま00年に63歳で亡くなってしまった。それが今――。「母の魂が癒え、病院から私たちのもとに帰ってきた。やっと会えた」と思った。

今、糸川と同じように統合失調症の親をもつ医師や学生たちからよく連絡がある。妹や弟の力になりたいと、親身に相談のっている。

敬称略(生井久美子)